



# 物語にもならない 小話

---

---

すう

---

日本で一番有名な、と言っても過言ではない、そんな物語『桃太郎』

その『桃太郎』の主人公、桃太郎さんに、なんと今回インタビューすることに成功。

あの度肝を抜く誕生から鬼退治の裏側など、余すところなく語っていただきました。

今振り返ってみると、いやまあ、無茶したなあって感じですかね。

世のため人のためって言っても、やっぱり鬼と戦うってねえ……想像できます？鬼ですよ、鬼！今ならちょっと出来ないですね。むしろなんで出来たのかなあって、自分でも不思議です。

## 鬼退治は恩返し

生まれはどこかっていうのは、わかんないんですよ。とりあえず桃から出てきたみたいなんですけど。おぎゃーって。

吃驚しますよねえそりゃあ。どでかい桃が川から流れてくるだけでも驚きなのに、中から赤ん坊ですよ。俺ならどうするかなあ。

そんな得体の知れない赤ん坊を、よく育ててくれたなあって思います。ええ、感謝してますよ本当に。

鬼退治に行こうと思ったのも、そのじいさんとばあさんのためってというのが大きいかな。二人とも老い先短いだろうし、恩返しというか、孝行するなら早くしてやんなきゃって思ってたんで。それでまあ、俺も男だし、やるならでかいことして喜ばせてやろうかなって。

まあでも勢いってありますよね。さっきも言いましたけど、今なら出来ないですはい。

で、色々準備して、いざ行かん！てな感じで出発したんですけど、実は俺、鬼って見たこと無くて。あ、もちろん噂には聞いてましたよ。どこそで暴れて女や財宝かささらったとか。めちゃくちゃでかくて強いとか。

でもねえ、実際見たわけじゃないんで、こう、すごくふわふわしてるんですよねえ、鬼ってもんが。人じゃないですからね、鬼ですからね。ま、俺も人かどうか怪しいもんですけど、桃から生まれてるんで。

そんなふわふわ状態で出発したんですよ、実は。やる気はあったんですけどね、やる気だけは。他はほぼノープラン。あ、目的地だけははっきりしてましたけど。目指すは鬼ヶ島ってね。あ、これ鬼たちのアジト。情報通の村人情報ね。

## 大道芸人誕生!?

そんな気持ちだけで出発してから数日後、道中、出会っちゃったわけですよ、あの3匹に。正確に

は2匹と1羽ですけど。

最初に会ったのは……えーと……そう、犬だ。なんか道端うろうろしてて。

で、そいつ見た時俺思ったんですよ、1人で鬼退治ってのはどうなんだと。いやその前からうすす思い始めてたんですけどね。鬼がどんなもんか知らないけど、さすがに1人ってのはないなと。

でも今更村戻って仲間集うってのもさ、ねえ、なんか、恥ずかしいじゃないですか。ていうかそういうやつは、俺が出発する前に「自分もお供します」とか言うてくるだろうし。

で俺は考えたわけです。この先鬼退治なんて危険なもんにつきあってくれる人間なんて、出会えるかどうか分からない。ならここで、この犬手懐けて連れて行ったほうがいいんじゃないかってね。

他の猿、雉も同じ。幸いやつら人馴れしてて、食いもんやったらすぐ懐いたよ。まさかばあさんからもらったきび団子がこんなかたちで役に立つとは思わなかったけどね。

そんなんで、犬、猿、雉、そして俺の、RPG風に言うところのパーティが誕生したわけです。

傍から見たら、俺大道芸人ですね(笑)とても鬼退治に向かう一行だとは思われないうらな。

いやしかし、なにが一番大変だったかって、鬼ヶ島に渡る時ですよ。小舟借りて渡ったんですけど、俺、泳げないんですよ。

もめっちゃ怖かったですよ！わかります？泳げないもののこの恐怖。

まあ、『鬼ヶ島』って、『島』ってわかった時点でこうなることもわかってなきゃいけなかったんだらうけど。まあ、わかってなかったわけだよな、俺。

しかも、周りが全員動物だからね。犬と猿と雉。もうゼーンゼン頼りにならない。うるさいだけ。思いましたその時。人間仲間にしときゃよかったマジ俺の馬鹿って。

で、俺が1人で舟漕いだんですけど。怖いし。波ちょっと時化てるし。船酔いするし。もう鬼とかどうでもいい帰りたいてって思ったよ、本気で。いやあホンと大変だった。

## 鬼退治は記憶無し!?

でもなんとか鬼ヶ島について、鬼も退治できて、無事帰ってこれたわけだし、よかったよかった。え？何？鬼を退治した時のことを詳しく？

あーそこね、うん……。正直言うと、あんまり覚えてないんだよな。

なにせ鬼と対面した時、海渡ってすぐだったからさ、俺既にぼろぼろで。船酔いでゲロゲロだったし。なんか、「あー、鬼って思ってた以上に大きいんだなあ」ってぼんやり思ったかなあ。

あ、あと、なんか持ってたんだよ、太い棒みたいなやつ。あれ鉄製かなあ。なんかとげとげが付いててね。鬼専用武器だよ。あんなの人間持てないもん。

それ見て俺ずるいなーって思ったんだよ。だって図体だけで俺の2倍？もっとあるか？位あって、筋肉ももりもりで。もうそれだけで俺らを圧倒してるのに、さらにあの武器って。ずるすぎるでしょう。

あ、あれ『金棒』っていうんですか？へー、知らなかった。あれ？なんか、もしかしてあなたの方が鬼について詳しくかります？え？偶々？そうですか……。

ああ、そうです。それでも俺、勝っちゃったんです。

いやもうそれは必死で、本当にもう覚えてない位必死で、刀とかワーって振り回してさ。命がけですもん。気がいたら目の前に鬼が転がってまして、もう「勘弁してください」みたいな。俺、必死になりすぎてとんでもない力を開眼させてたんですかねー。とりあえず、もう迷惑かけないって確約と、お宝回収して帰ってきましたけど。

## めでたしめでたし

それで村に帰ってきたらもう英雄扱いですよ。あの愉快的仲間たちまでもが、もう神様みたいな扱われちゃって。あまりにも大事にされすぎちゃって、今すごい太っちゃってますよ。まん丸の犬、猿、雉。もう鬼退治は無理ですあれ(笑)

いやでも、じいさんとばあさんがすごく喜んでくれて。「おまえは自慢の息子だ」って。それ聞いた時は、やったかいがあったなって思いましたね。

ばあさんなんて、「このきび団子売りに出そう」って張り切っちゃって。うまくいけば村興しになるってさ。

老い先短いなんて思ってたけど、あれは当分心配ないや。

どう、めでたしめでたしって感じでしょ？

私は、生まれた。

穏やかな日差し。やわらかく、あたたかく、私は包まれている。

もうすぐ私は旅に出る。生まれて間もない身だけれど、それが私のお役目。

今日は風がいつもより強いみたい。きっとこの風なら、遠くまで行ける。ああ、早く行かなくては

。頭の綿毛が大きく揺れて、あ、と思ったときには、私のからだは、ふうわり、宙に浮かんでいて、ぴゅう、と風に吹かれたら、私のお宿は見えなくなった。

ふうわり、ふわり、風に乗って。くるりくるり、回って揺れて。

どこへ行くのかな。

初めて見る景色は、どれも魅力的。四角い建物に、赤い屋根、青い屋根。塀の上で、猫はお昼寝。人間の子供が、公園で遊んでいるよ、楽しそう。2羽の鳥が、競い合いながら、青い空を飛んでいく。どれもお宿に居た頃に、よく来るミツバチが話してくれたことだけれど、私はとっても嬉しくて、みんなに「ありがとう」って言いたいよ。

天気が良くて、良かったな。綿毛がふわふわ、いっぱい飛べるね。

あれ？何かに引っかかったよ。なんだろう。

ああ、これは人間の髪の毛。長くて、いい香り。

飛ぶのはお休み。このまま、新しいお宿は見つかるかしら。

この人間は、私をどこへ連れて行ってくれるの？

ふうわふうわ、私が揺れて、髪も揺れる。面白いね。

あら、いつの間にか、人間がいっぱい居るよ。楽しそうにおしゃべりしてる。

あ、私に気が付いた。

指でつまれて、ぱっ。

再び空中へ。

そこに一陣の風。バーって吹いて、人間の髪もバーってあおられて、私はワーって、彼らとさようならをした。

ふうわり、ふわり、風に乗って。くるりくるり、回って揺れて。

気持ちいい。

そして、ふっと、たどり着いた、土の上。周りには、大きな木。みんな、ようこそって言うてる。

ここが私の、新しいお宿。

はじめまして、どうぞよろしく。

少し湿って、やわらかい土。素敵なところね。

さあ、早速、根を張りましょう。

これはとある男の、些細な悩みを綴った物である。

「人生とは、選択の連続である」とは誰の言葉であったか。

わからないが、確かにそうなのかもしれない。

と私は最近思っている。

一日の中で、我々は何度となく選択をしている。

どれを着ようとか、何を食べようとか、人生にはあまり、まったくとは言わないがあまり影響がないような、そんな小さな選択を、私たちは毎日している。

選択しない日なんて、無い。

これは私の。あくまで私にとってののだが、日常で一番苦しめられる選択。

それは、買いものだ。

家とかそんな大きな買いものではなく(家など買ったことは無いし)ここで私が言いたいのは、日常のちょっとしたものだ。

服、装飾品、あと娯楽品。

なくても困らないのであろうが、しかし欲しい。欲しくてたまらん。

しかしそれで衝動買いなんぞをした日には、後悔することも少なくはないし、一生懸命働いて手にしたお金、無駄にもしたくない。

なので私は、後悔しないように、欲しいものがあっても、その場はぐっと堪えて、一旦持ち帰って、本当にそれが自分にとって必要なものなのかどうかを考えることにした。

さすれば、買いものにおいて後悔することなどない。

かと思えばそうでもなかった。

「これは私に必要だ」という判断を下し、意気揚々と買いに行くと、それはすでに、他の誰かのものとなっておりました。などということが起こったりしたのだ。

そんな時の私の後悔の深さは、同情した後輩が有名店のプリンをおごってしまうほどであった(私はプリンが好物だ)

一期一会の買いものということか。

ただ手に入れたい。そんな買いものもある。

必要か必要でないかではなく、ただそれを自分のものにしたい。使うことはないが、買うことで満足するというような。

あるものをコレクションしていて、もう飽きてきているのに、新しく出るとつい買ってしまったり。

「これは私が買ってあげなくては」などと訳のわからない義務感で買ってしまったり。

そんな買いものもある。

コレクションといえば、まだ飽きてはいない大事なコレクションを、己の判断で勝手に捨てるのはよしてもらいたい。あれは持ち主の一部を捨てているのと同義である。

話がそれた。

買いものなのだから、全てが「買う」「買わない」の二つしか選択肢はないのだが、それによってこれからの人生が大きく変わるなどということもないのかもしれないのだが。

それでも、悩む。

ああ、悩ましき人生。

そして私は、この選択に、今日も大いに悩むのだ。



私の死に慟哭はいらない。欲しいのは喝采。無限に続く喜び。  
大事なものは結果。それにより全ての道程の価値は決まる。  
勝利だけ。勝利だけが求められているのだ。

私の身に齎されたのは使命か、運命か、宿命か。何にせよ、意思は後から合わされる。  
全ての人々の願いが、私にとっての人質。もはや進むしかないのだ。  
仲間との縁は、幸福を齎してくれるだろうか。

癒しの品は、身体に鞭打つ為のもの。

汚れても、疲れても、強くなる為に進み、勝つ為に進む。

疑問を抱いてはならない。信じるしかない。その先にあるものが、自分の求めているものであると

。使命であればいい。運命であればいい。宿命であればいい。

私の行く道が正しいと、証明しておくれ。剣を振るい、敵と信ずるものを倒し、仲間を失っても、傷ついても、辿り着く場所が、正しき世界なのだと、どうか。どうか。

夢を数える君の手を、私は握ることが出来るだろうか。

幼き頃の微笑を、私は湛えることが出来るだろうか。

「誇り」と「名誉」は、私を幸せにしてくれるだろうか。

幸福な夢を、再び見ることは出来るだろうか。

同じ空の下、ここではないどこかに、私の帰る場所はあるだろうか。

帰りたい。帰りたい。勝たなければ帰れない。信じなければ進めない。残さなければ逝かれない。

ここで私が出来るのは、ただひたすらに、戦うのみ。

前を塞ぐものは敵。

戦うことしか出来ず、戦うしか術はない。

私は、戦士。